



世界にとどまる：
E・H・カー『歴史とは何か』の政治思想

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西村, 邦行 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00006332

世界にとどまる

E・H・カー『歴史とは何か』の政治思想

西村 邦行

北海道教育大学旭川校政治学研究室

Not Away from This World

E. H. Carr's *What is History?* as a Work in Political Thought

NISHIMURA Kuniyuki

Department of Politics, Asahikawa Campus, Hokkaido University of Education

概 要

人文・社会科学の古典として名高いE・H・カーの『歴史とは何か』は、従来、歴史研究に関する方法論の書として読まれてきた。しかし、その題名に掲げられている問いは、歴史がいかなる意味を持つ事象かということまでを射程に含んでいるとも解しうる。本稿では、同書の全体像を、判断の土台をめぐる論理の体系として捉えなおし、その中で示されている歴史概念の政治的な含意に光を当てた。また、そこから、カーの思想に関して今日の再評価を補完する知見を提出するとともに、いわゆる現実主義の思惟様式において歴史概念が占める位置についても示唆を与えた。

はじめに

1961年にその初版が刊行されて以来、E・H・カーの『歴史とは何か』は、人文・社会科学における古典の位置を占めてきた。歴史研究の方法を扱った今日の概説書を見わたしてみても、その議論はしばしば、準拠すべき土台という形であれ乗り越えるべき関門という形であれ、基本的な参照点を成している。¹ 出版40周年および50周年というそれぞれ切れ目の年に、『歴史とは何か』を一つの到達点としてその後の歴史学の

1 例えば、浜内謙『現代史を学ぶ』（岩波書店、1995年）、R・J・エヴァンズ『歴史学の擁護——ポストモダニズムとの対話』（今関恒夫／林以知郎監訳、晃洋書房、1999年）、J・L・ギャディス『歴史の風景——歴史家はどのように過去を描くか』（浜林正夫／柴田知薫子訳、大月書店、2004年）。

発展を査定する試みが現れたことから、この書が果たしてきた役割は確認しうる。²

こうして、同書は一般に、歴史学上の著述と理解されてきた。過去数十年にわたってカーの再評価を推し進めてきた国際関係論の研究者たちに目を向けてみても、この点は窺うことができる。彼らの議論において、『歴史とは何か』はそもそも考察の外に置かれることが多い。³あるいは、稀に触れられる場合にも、国際関係論上の含意を読み解く補助線として持ちだされるのが一般的である。⁴ 同分野において、『歴史とは何か』は、読まれてこなかったということはないが、固有な知見を持った作品と扱われることはなかったのであって、同書を政治ならざる歴史を扱った述作だとする前提がそこには透けて見えるのである。

確かに、『歴史とは何か』を歴史学の書と捉えることは、その題名に「歴史」の語が含まれる点からして妥当なようにも思われる。ただ、しかし、そこにおいてその「歴史」は、正体が「何か」と質される対象である。様々なやり方で接近しうる歴史なるものはそもそもいかなる事象ないし概念なのか、という問いがここでは立てられているのである。その射程は、カーにとって、カーの時代において、あるいはより普遍的に人間の生において、歴史にはいかなる意味があるのかというところにまで及んでいるとも考えうる。そして、『歴史とは何か』の中でカーが展開している議論からは、そうした含意を汲みとることが実際に可能である。

本稿は、『歴史とは何か』を政治思想の書として読みなおす試みである。このように述べたとき、同書の政治的含意に注目した研究が既に複数存在することには留意しておくべきであろう。上にも触れた国際関係論における研究の中にも、同書が持つ自由主義批判としての側面を強調したものが存在する。⁵ また、作品が書かれた時代背景に目を向け、当時の政治的状況に対するカーの認識がいかなる形で作中に反映されているかを明らかにした研究もある。⁶ しかし、これらが論じているのは、『歴史とは何か』に投射され付加されたカーの政治観である。対して、本稿が解明を試みるのは、同書の議論それ自体が持つ政治思想的な意味である。

以上とは別に、『歴史とは何か』の論理に内包されている進歩主義のイデオロギーを指摘した研究もある。⁷ その中には、カーを歴史家として見ることに否定的なものすらある。⁸ その論旨については、本稿著者も大

2 D・キャナダイン(編)『いま歴史とは何か』(平田雅博ほか訳, ミネルヴァ書房, 2005年), 喜安朗/岩崎稔/成田龍一『立ちつくむ歴史——E・H・カー『歴史とは何か』から50年』(せりか書房, 2012年)。

3 国内外においてそれぞれカーの再評価に先駆的な役割を果たした以下の代表的な研究を見ても、『歴史とは何か』への言及は認められない。C. Jones, *E. H. Carr and International Relations: A Duty to Lie* (Cambridge University Press, 1998); 遠藤誠治「『危機の二十年』から国際秩序の再建へ——E・H・カーの国際政治理論の再検討」『思想』945号(2003年), 47-66頁; S. Molloy, *The Hidden History of Realism: A Genealogy of Power Politics* (Palgrave, 2006), ch. 3.

4 宮崎淳「E・H・カーの歴史観と平和思想」『大東法政論集』6号(1998年), 129-48頁, T. Smith, *History and International Relations* (Routledge, 1999), ch. 3; R. Germain, "E. H. Carr and the Historical Mode of Thought," in M. Cox (ed.), *E. H. Carr: A Critical Appraisal* (Palgrave, 2000), 322-36; 清水耕介「現代との対話としての英国学派」佐藤誠/大中真/池田丈佑(編)『英国学派的国際関係論』(日本経済評論社, 2013年), 58-78頁。この他、理論と歴史の関係を考察するための事例としてカーを取り上げている次の研究も参照。山中仁美「国際政治をめぐる「理論」と「歴史」——E・H・カーを手掛かりとして」『国際法外交雑誌』108巻(2009年), 66-82頁。

5 M. Babik, "Realism as Critical Theory: The International Thought of E. H. Carr," *International Studies Review* 15(2013), 491-514.

6 有泉貞夫「E・H・カーにおける歴史認識の展開」『歴史学研究』296号(1965年), 35-49頁; R. J. Evans, "Introduction," in E. H. Carr, *What is History?* (Palgrave, 2001), ix-xlvi.

7 A. Stephanson, "The Lessons of *What is History?*" in Cox, *op. cit.*, 283-303.

8 K. Jenkins, *On 'What is History?': From Carr and Elton to Rorty and White* (Routledge, 1995), ch. 2; K. Jenkins, "An English Myth?: Rethinking the Contemporary Value of E. H. Carr's *What is History?*" in Cox, *op. cit.*, 304-21. ここに挙げたK・ジェンキンスの二つの論稿はほぼ同一の内容であり、以下、重複箇所を参照する場合は1995年版の書誌情報のみを示す。なお、『歴史とは何か』を閉却することで、カーの歴史家としての仕事に否定的な眼を向けていると思われる研究もある。

きな異論はない。ただ、本稿が『歴史とは何か』の政治思想的な側面を照らしだす上で試みるのは、それら諸研究の主張を補強するようにカーのイデオロギー性をさらに掘り下げて論じるといったことではない。むしろ、進歩主義にしたところで、一義的には、カーの歴史観が帯びている特徴でしかなく、カーが論じたところの歴史そのものではないというのが、本稿の出発点である。対して、本稿が取り組むのは、「歴史とは何か」というまさにその問いに対するカーの答えを探ることである。⁹

次節では、『歴史とは何か』の叙述を順に追い、同書の議論が、判断の客観性に関して論理の一大体系を築き上げたものであると説く。続いて、カーがなぜこの体系を打ち立てねばならなかったのか、背後にある彼の同時代認識を基に読み解き、歴史が彼の思想に占めていた位置を明らかにする。結論から言うと、カーが歴史の内に見ていたのは、人々が宗教やそれに類する道徳を超克した時代に事物の判断を下す上で必要となる、経験的なものとしての土台であった。事物の客観性の基準を探るにあたってあくまでも人為の領域にとどまろうとした点においてこそ、『歴史とは何か』は高度に政治思想的な意味を帯びた作品であった。終節では、カーのこうした歴史理解を手掛かりとして、現実主義思想の中で歴史が占める位置について若干の考察を提示し、本稿の知見とそこから導きだされる課題とを整理する。¹⁰

1. 個人／社会／歴史

以下、『歴史とは何か』の議論を1章ずつ追っていく。テキストの検討を進めていくにあたり、まずは作品の章立てを確認しておきたい。

- 1 章：歴史家と（彼の）事実（The Historian and His Facts）¹¹
- 2 章：社会と個人（Society and the Individual）
- 3 章：歴史と科学と道徳（History, Science and Morality）
- 4 章：歴史における因果関係（Causation in History）
- 5 章：進歩としての歴史（History as Progress）
- 6 章：広がる地平線（The Widening Horizon）

例えば、第二次世界大戦後の各国の歴史学を概ね包括的に俯瞰した次の論文集において、カーの名前はそのいずれの頁にも現れることがない。A. Schneider and D. Woolf (eds.), *The Oxford History of Historical Writing: Historical Writing since 1945* (Oxford University Press, 2011).

9 ただし、本稿で言うところの歴史学的な読みと政治思想的な読みとは相互に排他的なものではない。本稿筆者は、これらの言葉をそれぞれ、人間と時間との関係を主たる関心に据える読み、人間と社会との関係を主たる関心に据える読み、という程度の意味で用いており、両者の違いはその焦点の置き方にある。

10 以下、『歴史とは何か』からの引用に際しては、(原著頁／邦訳頁)の形で参照先を本文中に示した。使用した原著は第一版の *What is History?* (Macmillan, 1961)、邦訳は清水幾太郎訳『歴史とは何か』(岩波書店、1962年)である。なお、訳文は適宜変更している。また、傍点はいずれも本稿著者による。

11 清水幾太郎の邦訳において、第1章の題に「彼の」という日本語は含まれていない。しかし、原題にはこの訳語に相当する his の語が与えられており、また、カーの議論の中核には、事実は歴史家が決定するものであるという主張もある。こうした事情に鑑みて、「彼の」という訳語を付加することが妥当であると、溪内謙は指摘している。溪内、前掲書、35頁。ただ、『歴史とは何か』第1章は事実全般について論じており、その中において歴史に関わる事実が占める位置を確定するのがカーの目的であること、また、幾人かの研究者が指摘している通り、カーの議論は一般に普及した理解に反して相対主義的なものではなかったことからすると、本人が his の語を用いているにも拘わらず、清水の訳を誤訳ではなく(清水自身の意図がどうであったにせよ)意識と捉える余地もあるように思われる。こうした判断から、ここでは、「彼の」という訳語を括弧書きで記す形をとった。

これら各章の中で、とりわけ頻繁に参照されてきたのは1章・3章・4章であろう。歴史とは過去と現在との対話であるという第1章末尾の文言は、(往々にして元の文脈からは切り離されながら)枚挙に暇がないほど繰り返し引用されてきた。また、第3章および第4章で扱われている歴史家の価値判断の問題は、『歴史とは何か』の刊行当初に議論の俎上に載せられて以後、しばしば注目を浴びてきた。¹²しかし、作品全体の流れを仔細に追っていくと、これまであまり注目されてこなかった第2章こそ、これら各章の議論の基礎となっていることが理解されるであろう。¹³そこで開陳されている人間観・社会観を前提にして初めて、カーの捉えた歴史の意味もまた明らかとなるのである。本節では、この点に注意を傾けつつ、『歴史とは何か』の構成を明らかにしていくこととしたい。

まず第1章では、事実とは何かをめぐる考察が、事実なるものの類別を伴いながら展開されている。一つには、年号など、史料的に確かな裏づけが存在する限り動かし難い事実が存在する。しかし、カー曰く、こうした基礎的事実それ自体を歴史と呼ぶことはできない。彼自身の表現を借りると、「正確だといって歴史家を賞賛するのは、建造物によく乾燥させた木材を用いたとか適切な配分のコンクリートを用いたとか言って建築家を賞賛するようなもので」(5/7)あり、「すべての歴史家にとって同一の基礎的事実なるものは、通常、歴史家の原材料に分類されるもので、歴史それ自体に分類されるものではありません」(5/8)。基礎的事実というのは、そのすべてが常に等しい重みを持って歴史の中に入り込んでくる類のものではない。どの基礎的事実が重要かは、結局のところ、歴史家が選択し決定するのである。「事実というのは、歴史家が呼びかけたときにだけ語るものです。どの事実についてどこで発言を許すかを決めるのは、歴史家なのです」(5/8)。

続く箇所において、カーは、R・G・コリングウッドの歴史哲学を引照しつつ、以上の主張をさらに補強していく。ここでの議論をもって、『歴史とは何か』は概して相対主義の書であると言われてきた。¹⁴しかし、実際にはカーは、コリングウッドからも次第に距離をとっていき、より中庸的な立場を支持する方向へと論を進めていく。¹⁵結果としてカーが訴えるのは、事実は客観的に存在するものだという見方とむしろ解釈の産物だとする見方の中間、「歴史の重心は過去にあるという見方と歴史の重心は現在にあるという見方」(23/38-9)の中間に位置することの重要性である。歴史とは「現在と過去の尽きることのない対話」(24/40)であるというあの有名な言葉は、この認識に与えられた一つの表現に他ならない。

その上で注目すべきは、この「歴史家の陥っている窮境は人間の本性の一つの反映」(24/39)であるとカーが見ていたことである。言い換えれば、歴史における事実についてカーが展開している議論には、その屋台骨を成す特定の間人観が存在していたということである。そこにおいて、歴史家が置かれている宙吊りの状態とは、人間が一般にこの世界を生きていく上で投げ込まれている状況でもある。カーは次のように述べている。「人間は…完全に環境に取り込まれているものでも、無条件に環境の支配を受けているものでもありません。他方で、環境から完全に独立して制約を受けずに支配しているというのでも決してありません」(24/39)。この認識を詳らかにしていく必要があるからこそ、論題として事実論からより直接につながるようにも見える第3章の科学論に先立って、「社会と個人」の関係が扱われねばならないのである。

12 同時代の書評としては、例えば、“Between Past and Future,” *Times Literary Supplement* (17 November, 1961), 813-14. また、V・メータ『ハエとハエとり壺——現代イギリスの哲学者と歴史家』(河合秀和訳、みすず書房、1970年)、第3章。

13 『歴史とは何か』を扱った研究の内でも包括的かつ同書に好意的なA・ステファンソンの論稿でも、第2章の議論は「最も時代に制約されたもの (time-bound)」とされている。Stephanson, *op. cit.*, 298.

14 このあたりの事情については、Jenkins, “An English Myth?,” 304-6.

15 Stephanson, *op. cit.*, 285-86.

そこで、続く第2章では、人間と社会とが截然と分けられるものではないことが論じられる。本人の言を引けば、「有史・先史を問わず、歴史上のどの段階のどの人間も、一つの社会の中に生まれて来るもので、出生直後からその社会によって形作られるものなので」(25/41-2)あって、「社会が先か個人が先かという問題は、鶏と卵の問題のようなもの」(25/41)というのがカーの認識である。人間は、その本性上、社会と渾然一体とした存在でしかありえないというわけである。

ひるがえって、そうした人間の一人として歴史家が行う仕事もまた、その背後にある環境とのあいだに不可分一体の関係を有していることになる。「歴史家の知識というのは、彼個人だけの所有物ではなく、おそらくは、多くの世代にわたる多くの国の人々が、その蓄積に参加してきたものなのです」(29/47)。歴史家というのは、いわば「社会の意識的あるいは無意識的なスポークスマン」(29/48)であって、歴史とは「社会の中にいる人間の過去を探究する過程」(42/67)なのである。第1章の事実論との関係で言うと、各歴史家が個々勝手に選択・判断を行うという意味での相対主義は、ここからは生まれてくる余地がない。あらゆる歴史家は、何がしかの集団に常に既に巻き込まれているのであって、歴史はどこまでも「社会的過程」(49/77)として捉えられるものなのである。したがって、先に触れた現在と過去の対話の意味も、次のように補足される必要がある。「歴史家と彼の事実との相互作用の過程は、前に私が現在と過去との対話と呼んだものですが、抽象的な隔絶された個人のあいだの対話ではなく、今日の社会と昨日の社会とのあいだの対話なのです」(49/78)。認識論上の一般的な論点を扱ったものとも思われがちな第1章の事実論は、社会思想としての意義も備えていたことが、ここで明らかにされていると言えよう。

こうして、カーの事実論の根底には、個人と社会の関係をめぐる固有な認識が横たわっている。その上で、続く第3章および第4章の議論にしても、第1章の事実論を前提に展開されていくこととなる。だとすれば、そこで思想の土台を成しているのもやはり、以上の間人観・社会観なのである。

第3章でカーは、歴史が科学か否かという問いに対し、五つの見解を取り上げる形で解答を試みている。まず、科学が一般的なものを扱う一方で歴史は特殊なものを扱うという論がある。しかし、実際には、歴史は特殊なものを通じて一般的なものに関心を寄せているのだと、カーは言う。「歴史は特殊なものとの一般的なものとの関係を問題にします。歴史家として、あなたは、事実と解釈とを区別することができないのと同じように、両者を区別したり、一方を他方の上に置いたりすることはできないのです」(59/93)。傍点を付した箇所からも察せられるように、ここではやはり、第1章の事実論が前提とされているのであり、その限りにおいて、第2章の間人観・社会観が投影されていると見ることができる。歴史は教訓を与えないという二つ目の論、歴史は予言ができないという三つ目の論についても、この同じ理解を基にカーは退けていく。一般化は、教訓を産みだし、(個別な予言ではないにせよ)将来の指針を編み出すというわけである。

残る二つの論への応答は、より直接にあの間人観・社会観から紡ぎだされている。まず、歴史は主観が入り込む点で科学と異なるという論について、カーは、結論を第4章へ先送りする旨を断りながら次のように述べている。「社会科学[カーの語彙では歴史研究もここに含まれる]は全般に、主体と客体の両方として、研究者と被検体の両方として人間を関与させるため、主観と客観との厳格な分離を宣言するいかなる認識論とも両立しないのです」(67/105-6)。これに少しく先行する箇所では、自然科学においてすら主客二元論が退けられつつあるとの言があり、そう述べることによってカーは、科学と歴史との近さを仄めかしている。ただ、科学と歴史とが実際にどの程度近いのかは、今は問題ではない。本稿にとって重要なのは、この問題を判断するカーが、主体と客体との関係をめぐる認識のあり方にその基準を求めていることである。すなわち、ここでもまた、主客を重なり合うものと見るあの間人観・社会観が、歴史を探究する上での前提として持ちだされているのである。

同じことは、カーが格闘すべき最後の論についても言える。歴史は宗教・道徳に関わる点で科学と異なる

というのがこの論の要旨である。対してカーは、歴史がそうした価値的なものと関わることは認めつつ、しかしだからといって経験を超えるような観念に屈従するものではないこと、したがってやはり科学の一領域として探究されるものであることを主張する。

道徳との関わりの方から見てみると、まずカーは、道徳判断を価値判断と言い換えることで、目下の問題と事実論とのつながりを明確にする。「歴史的事実とは、前に見たように、何らかの解釈を前提とするものであり、歴史的解釈は常に道徳的判断——より中立的に聞こえる言葉をお好みなら、価値判断——を伴うものなのです」(73/114)。その上で、この価値判断を行う主体をめぐってはやはり、「われわれは社会の中へ生まれ、歴史の中へ生まれるのです」(75/118)といった言葉が繰り返されるであろう。

歴史が科学か否かをめぐる議論においても、個々の歴史家の判断は同時に集団的な判断としての面も持っていることが、改めて述べ立てられているわけである。ただ、ここではさらに、それゆえ超経験的な判断基準もまた存在しないという主張が付されている。

歴史は運動であり、運動は比較を暗示します。だからこそ、歴史家は、「善」とか「悪」とかいう妥協のない絶対的な概念よりは、「進歩的」とか「反動的」とかいう比較の性質を持つ言葉を用いて自身の道徳的判断を表現する傾向があるのです。これは、さまざまな社会や歴史的現象を、絶対的な基準との関係においてではなく、それら相互の関係において明らかにしようとする試みなのです。それに、これらの絶対的で歴史の外にあるとされる価値基準を吟味して行きますと、それらもまた実は歴史に根ざしたものであることがわかるのです。…社会から切り離され、歴史から切り離された抽象的な基準や価値というのは、抽象的な個人と全く同様の幻想なのです(77-8/121-2)。

この一連の議論に先立つ箇所では、歴史と宗教との関わりについても簡単な応答が行われているが、その内容もまた、ここに示されているのと同じ認識を反映したものである——「歴史家はいかなる機械仕掛けの神にも頼らずに自分の問題を解かねばならない、歴史とは、言ってみれば、ジョーカーを使わずに遊ぶゲームなのだと思えるべきでしょう」(69/108)。

以上のように、事実の判断基準がどこに位置するのかという問題は、その立論の基礎に固有な人間観・社会観があることを明かし立てた第2章を経て、この第3章においては、個別の学問分野での探究作法といった以上の広がりを持った論点へと昇華されている。そして、その議論の只中において、当の基準の所在は、この世界の内のどこかであることが示唆されているのである。とはいえ、その具体的な場所は、この段階においては未だ明らかにされていない。それが読者の眼に見えてくるのは、続く第4章を経た先の第5章でのことである。

カーが第3章で結論を一部先送りしていたことは既に言及したところである。その点からも窺われるように、価値判断をめぐる上の諸論点は、第4章で扱われる決定論および偶然の問題とのあいだに密接な関係を有している。この章でカーが取り組んでいるのは、歴史もまた科学として因果関係を探究するものであるという主張をさらに掘り下げて提示することである。ここではまず、そもそも因果関係なるものが歴史に存在するかという問いがあり、それに然りととの答えが与えられた上で、真なる因果関係を単なる偶然と区別するものは何かと話が進んで行く。

カーがここで最初に試みるのは、彼が言うところの決定論を擁護することである。決定論という言葉はしばしば論者に依じて意味を異にするが、カーはこの語を次の意味で用いている。「決定論とは、起こることにはすべて一つあるいは複数の原因があり、それら一つあるいは複数の原因にも変化がなかったならば、別

様には起こりえなかったという信条である、と定義しましょう」(87/136)。目下の議論において、この定義の妥当性を問う必要はない。カーにとっては、このように捉えられたものとしての決定論を擁護することが、歴史における因果関係の成立を認めることの意味であったと確認できれば、それで十分である。

その上で今、カーが退けるべきは、自由意志の存在を理由に歴史における因果関係を否定する視座である。カーは一つの例を持ちだしながら説明を試みる。その例とは、普段温厚なスミスが、ある朝挨拶に罵詈雑言で返してきたというものである。そうした場面に接して、人は普通、スミスの行動を自由意志の発露と称賛したりはせず、家庭で何かしらあったのだといったことを考えるであろう。ここから窺われるように、人が自由であるということと人の行為が固有な原因によって決定されていることとは、日常の生活において対立しない。したがって、人には自由意志があるのだからその行動は因果関係として測れないなどという主張も、机の上以外では成立しえない。「人間のあらゆる行動は、どの見地から考えるかによって、自由でもあれば決定されてもいるのです」(89/139)。

これがカーの主張するところである。以上の説明の妥当性についても、やはり本稿では問う必要がない。重要なのは、この論理の背景にも、個人と社会を不可分一体とする認識があるということである。上の例の記述と前後する箇所、カーは次のように述べている。「決定論は歴史についての問題ではなく、人間行動すべてについての問題なのです。その行為が原因を持たず、したがって決定されていないというそんな人間は、前の講演で触れた社会の外部にある個人と同様の抽象的観念です」(87/136)。

こうしてともあれ歴史に因果関係の成立を認めたカーは、続いて、では正しい因果関係と偶然とを分けるものは何かという問題に立ち入っていく。この点に関して、彼はやはり、同じ人間観・社会観を論理の基礎に据える形で解決を与えようとする。というよりも、カーの見るところ、偶然をめぐる問題とは価値判断の問題そのものである。クレオパトラの鼻がもし低かったなら、というよく知られた歴史のイフを取り上げて、それがあまり意味のない仮定であるとしつつ、彼は次のように言う。「いわゆる歴史上の偶然というのは、歴史家が第一に研究しようとする問題にしている因果の連鎖を遮断する——そしていわば、それと衝突する——因果の連鎖のことなのです」(93/145)。結局、クレオパトラの美貌という偶然にしても、それ自体は後の歴史に対して一つの原因を形作っているというわけである。一般化して言えば、偶然というのも、その偶発事を原因として何がしかの結果を生みだしているということである。であれば、そこに認められる因果関係の鎖を他の因果関係といかに区別するかは、歴史家の解釈の問題と考えられる。

歴史家は、事実の無限の海から自身の目的に重要なものを選びだすのとちょうど同じように、多くの因果の鎖の中から歴史的に重要なものを、歴史的に重要なものだけを抜きだすのです。そして、歴史的に重要かどうかの尺度となるのは、彼の合理的説明・解釈の型にそれらの鎖をはめ込む彼の実力です。因果の他の鎖は偶然的なものとして退けられねばなりません、それは原因と結果の関係が異なるからではなく、鎖そのものが無関係だからです(99/155)。

ここでもやはり、固有な人間観・社会観を前提としたあの事実観が顔を覗かせている。ただ、注意したいのは、歴史家の選択・判断材料として、「合理的説明・解釈の型」なる基準が新たに一つ持ち込まれていることである。この意味するところについて、カーは以下のような言葉でも表現を試みている。

理性の能力は、通常、なんらかの目的のために用いられるものです。…思うに、私たちがあつた説明を合理的とし、他の説明を合理的でないとしたとき、私たちはある目的に役立つ説明とそうでなかった説明とを区別していたのです。…前者[合理的な原因]は、潜在的に言って、

他の国々、他の時代、他の条件にも適用しえますので、有効な一般化を生みだし、そこから教訓がえられるのです。それはわれわれの理解を深め、広げる目的に資するのです。ところが偶然的な原因の方は、一般化できません。…歴史の因果関係をめぐる議論に鍵を与えるのは、この目的の観念にほかなりません。そして、目的の観念は必ず価値判断を伴います(100-1/157-8)。

この一連の文章は、これまでの議論を総括する意味合いを有していよう。歴史は科学として因果関係を探るものであり、その因果関係が確定されることで、一般化が起こり、教訓がえられるわけであるが、その一続きの作業において価値判断が下される際には、特定の目的を実現すべく理性を動員する過程が選別されているというわけである。別言すると、第3章においては未だこの世界の中に存在するという以上のことが述べられてはいなかったあの判断基準なるものは、ここで初めて、理性および目的に結びつくものであることが判明するのである。

ところで、今カーの語彙に組み込まれることとなった目的という概念は、時間の流れを考えた場合、現在から歩み進んだ地点にその達成を待つところのものである。だからこそ、続く第5章では、歴史における未来の意味が扱われる運びとなる。

この未来の意味をめぐる問題は、カーの叙述において、進歩の有無という問いに置き換えられる。言い換えれば、カーにおいて、進歩は未来と等価で語られるものとして観念されていたということである。具体的には、カーは、進歩の観念が歴史にとって不可欠であることを、進歩に関する四つの定義を持ちだして示そうとする。

進歩が意味するものの一つ目は世代間の知の伝達であるが、これについてはひとまず文字どおりに受け取っておこう。過去のもものが未来へ向けて蓄積されていくというのは、通常私たちが用いる意味での進歩の概念にも含まれていると思われる。したがって、カーの議論に特異な面があるとすれば、それは残る三つの含意についてである。ただ、それら諸点について検討を進めていったならば、知の伝達という目下の定義にしても、いくらか独特の意義を備えていることが明らかになるであろう。

そこで、カーが二つ目に挙げる定義であるが、それは、目的論的ではない過程としての進歩というものである。彼自身の言葉を借りれば、進歩とは、「打ち続く諸時代の要求や条件がそれぞれ特有の内容を投じるころの過程」(109/170) だということになる。この意味での進歩において、歴史が流れついていくところの目的は固定されたものではない。「歴史家にとって、進歩の目的(end)は、既に進化してしまったものではありません。それは、まだ限りなく遠い何かで、それを指し示す針は、私たちが進まねば見えてこないのです」(110/171)。

この点、カーが意味するところの進歩は、通常この言葉で指し示されるよりも多様な変化を内に含んだものであると言える。そして、残る二つの定義は、進歩のこうした柔軟さともいべき性質を一層高める効果を有している。その一つは、進歩とは不連続な過程であるというもので、これについて、カーは次のように述べている。「ある集団には没落の時代と見えるものが別の集団には新しい前進の始まりと見えることが、大いにありえるのです。進歩は、すべての人にとって平等かつ同時的であるということが、ありませんし、ありえません」(110-1/173)。行き着く先が固定されていないばかりでなく、その道筋も常に揺れ動くものだというわけである。

今一つは、進歩とは解釈の産物であるというものである。何らかの目的に向けて闘争を行っている人々は、進歩を実現しようという意志でもって行動を起こしているわけではない。そうした行動を進歩として理解するのは、あくまで歴史家である。「市民権を皆にと戦う人々…は、意識的に「進歩」をし、進歩についての何かしらの歴史「法則」なり「仮説」を実現しようとしているのではありません。彼らの行為に自分の進歩

の仮説を適用し、彼らの行為を進歩として解釈するのは、歴史家なのです」(111/173-4)。

この四つ目の定義においては、歴史があくまで人間社会をめぐる事象・概念であることが再び強調されていると言えよう。基準としての未来は、そこに人々が諸目的を投じていくことで明らかになっていくものであったが、それを過去と結びつけるのもやはり人間たる歴史家なわけである。先ほど、一つ目の定義にも特異な意義があると述べたが、それはまさにこの認識の存在による。というのも、こうして過去と未来をつなげるものが解釈であるとき、知の伝達を行うのはその解釈を行う歴史家に他ならないからである。だからこそ、カーは、そうした遺産の継承が自然界における遺伝と異なることに注意を促すのである。「人間が先達の経験から恩恵を(必ず受けるというのではないけれど)受けうるということ、歴史における進歩は、自然における進化と違い、獲得された資産の伝達次第であるというのが、歴史の前提です」(111/173-4)。

こうして、常に対話を繰り返さなければならない歴史家の——ということは、カーの理解からすると、等しく宙吊り状態にある人間一般の——判断の基準たるべき未来は、いくらかアド・ホックな参照点として理解されている。以下の引用は、ここまでのカーの議論を要約したものと捉えることができる。

進歩を信じるというのは、何かしらの自動的ないし不可避免的な過程を信じるということではなくて、人間の潜在力の漸次的な発展を信じるということです。…人類が追求する諸々の具体的な目的は、時に応じて、歴史の進行の中から現われてくるものであって、歴史の外にある何かしらの源泉から現われてくるものではありません。人間の完成可能性や地上における未来の楽園など、私は信じません。…私たちがそれへ向かって行って初めて明らかにされうるような、そして、その妥当性はそれに到達する過程の中でのみ検証されうるようなゴールへと向う、限らない進歩——私たちが想い描くことができたり、想い描く必要があったりするようないかなる限界にも服さない進歩——の可能性で、私は満足しようと思います。こういう進歩の観念がまったくなかったならば、社会はどうやって存続できるのか、私にはわかりません(113/176-7)。

ここに至って、客観性は「事実と解釈の、過去と現在と未来の関係の客観性」(114/178)と定義され、それに呼応する形で、歴史は「過去の諸出来事と漸進的に現われてくる未来の諸目的との対話」(118/184)と言い換えられることとなる。そして、今しがた傍点を付した「社会はどうやって存続できるのか」という文言にも窺えるように、歴史家の役割や探究作法を論ずる中でカーが問うていたのは、再三繰り返してきた通り、人間および社会一般のあり方であった。こうして、事実論に始まる『歴史とは何か』の議論は、人間がこの世界で下す様々な判断に基準を与えるものは何かという問いについて、歴史家の役割という視点から考察したものである¹⁶。

2. 君臨する人間

ここまで、『歴史とは何か』が、判断の客観性の所在をめぐる一つの政治思想的な思索として読解しうることを明らかにしてきた。カーにとって、歴史とは、現実ないしは人間社会を構成する条件にして指標であっ

16 やや異なる意味においてはあるが、『歴史とは何か』を評して、寺尾誠も次のように述べている。「本書は単に歴史を研究するものにとっただけでなく、現在に生きるものすべてにとっ極めて重要な示唆を与えてくれる」。寺尾誠「E・H・カー著『歴史とは何か』『三田学会雑誌』55巻(1962年)、615頁。この他、R・ジャーメインも、『歴史とは何か』が社会科学一般における判断の問題を含んでいると示唆している。ただし、ジャーメインは、その点に関する具体的な議論を展開してはいない。Germain, *op. cit.*, 325.

て、現実と歴史とはほとんど同義の関係にあった。あらゆる現実には歴史的であり、歴史を離れたところには現実はない。作品の半ばにおいて、カーは、「社会学というのは、それぞれに特殊で、固有の歴史的な事情と条件によって形作られている歴史的な社会を問題にするものです」(60/94)とし、「歴史が社会的になればなるほど、社会学が歴史的になればなるほど、双方にとってよいことなのです」(60/95)と述べているが、この認識も、歴史とは何かをこのように把握するところから出てきたものと解せよう。

では、カーはなぜ、この論理に辿りついたのだろうか。歴史を離れて現実が存在しえないとの認識からしても、歴史が以上のようなものとして理解されるに至った背景には、それ自身の歴史的な文脈ないしはカーがそう把握したところの歴史の流れが存在していると考えられる。結論から言うと、「歴史とは何か」という問いは、カーにとって、純哲学的な性質のものではなかった。この問いは、カーが同時代を生きる上で突き当たったところのものであって、「歴史とは何か」という問いが出てくるほどに歴史に対する意識が高まったということ、それこそが議論の始点だったのである。以下、『歴史とは何か』に散りばめられている彼の時代認識を見ていくところから、この点を示し、ここまで論じてきたカーの思索の意味をさらに追究していくこととしたい。

『歴史とは何か』には、その全篇を通して、19世紀（以前）とそれ以後との精神史上の差異に関する言及が認められる。実に、書籍冒頭の議論が、1896年のアクトン卿と1957年のクラーク卿のあいだの歴史観の違いから開始されている。一方には完成されるものとしての歴史、事実の集積としての歴史の観念があり、他方には常に塗り替えられていくものとしての歴史、解釈の産物としての歴史の観念がある。これはちょうど、主客二元論に基づく独立した主体に信頼を残した時代と、そうした原子的个人の概念を疑う時代との対比でもある。そして、この両者の違いは、既に何度も強調してきた第2章でのカーの人間観・社会観からも推察されるように、それぞれの時代の社会がその基本的な態様において異なっていることの現れでもあった。「アクトンとジョージ・クラーク卿との不調和は、二つの発言のあいだの隔たりにおける私たちの社会観全体の変化を反映したものです」(2/3)。

事実とは何かという問いが発せられるのも、この認識を受けてのことである。したがって、事実をめぐる議論も、19世紀の信条体系に対する社会批評を伴いつつ進められている。例えば、カーは、次のように述べている。「19世紀のリベラルな歴史観は、自由放任の経済学説という、これまた穏やかで自信に満ちた世界観の産物と深い関係がありました。誰でも自分の仕事に精を込めたい、そうすれば隠された手が普遍的な調和を整えるだろう。歴史上の事実それ自体が、より高いものへ向う恵み深くかつ限りがないように見える進歩の、その実証となる最高の事実だったので」(14/23)。この主張の裏側では、第3章での議論を先取りするかのように、そうした19世紀的な思潮の宗教的性格が退けられるべきものと色づけされている。「歴史家たちは一片の哲学で身体を蔽うこともなく、裸のままに恥ずかしいとも思わずに歴史の神の前に立ち、エデンの園を歩いていたのです」(14/23)。しかし、「それから後、私たちは罪を知り、墮落を経験しました」(14/23-24)。このように現状を理解した上で、カーはこう問うている。「それでは、20世紀の半ばにおいては、歴史家の彼の事実に対する義務をどう規定したらよいのでしょうか」(22/36)。

歴史とは何かという問いが人間と社会との関係を根底に据える問いであったように、その問いを発しているカー自身もまた、歴史と社会に生まれ落ちた人間であった。そして、そのことを、彼自身が自覚していたのである。「歴史とは何か」という問いは、正確には、「この時代のこの社会において歴史とは何か」という問いだったのであり、カーにとってみれば、それ以外の問いではありえなかった。

このような問題理解は、繰り返し強調してきたあの第2章の人間観・社会観の帰結と捉えることができる。他方、個人と社会との不可分性というその当の認識すら——カー自身はそれを人間の本性と呼んだにせよ——時代の拘束と無関係ではなかった。まず、カーがこの不可分性を言うとき、攻撃的となっているのは

個人という観念そのものではない。争点となっているのは、「人間を個人と捉える見方の方が人間を集団の一員と捉える見方より誤解を招くか否か、ということではありません。誤解を招くのは、両者のあいだに一線を画そうとする試みなのです」(41/65)。そして、カーの見るところ、まさにこうした試みの妥当性を信じ込んでいたのが19世紀であった。個人と社会が卵と鶏の関係にあるという、「こういった判り切った真理は、今、西歐世界がようやく脱けだそうとしている異常で例外的な歴史上の時期のために私たちの眼に入り難かったということがなければ、云々する必要もなかったのでしょう」と、別のところで彼は述べている(27/44)。この限りにおいては、個人と社会の不可分性というのも、20世紀的な認識だったのである。

同時代とそれ以前との差異が強調されるのは、第3章以降も同様である。歴史と科学の関係についても、19世紀以降の流れを追うところから議論が始まっている。スペンサーとダーウィンからJ・ビョアリまでの時代は、科学と歴史的進歩が手を携えており、したがって歴史が(客観的事実の収集を行う)科学であるという観念も維持されえた。対して、コリングウッドの時代になると、自然科学研究と歴史研究とのあいだには一線が引かれるようになった。「科学者やアクトンのような歴史家が、十分に裏づけられた事実の収集を通じ、一切の論争問題を一挙に解決するような知識の一大集成を作り上げる日を望み見ていた19世紀というのは、遠くなったものです」(55/87)。続く第4章でも、20世紀の初頭を転換点とした文言が挿し込まれていよう。「歴史における偶然の重要性に関してイギリスの著述家たちが改めて主張するようになったのは、20世紀とともに始まり、1914年以後顕著になった不確実と不安というムードの発展を端緒としています」(94/146)。そして、進歩主義を論じた第5章でも、中世に生まれた目的論をより現世的な形に改鑄した近代に対し、20世紀の初頭には没落論が広まり始めたという流れがまず粗描されている(103-7/161-7)。

こうして、先にも予告した通り、『歴史とは何か』の議論は、それ自体、歴史的な文脈の中での思索という性質を強く有しているわけである。だからこそ、最終章の第6章は、著者カーが自身の同時代をどのような時代なのか語る章となっている。

彼の論理の構造を描き出すことに傾注した本稿前節においては、その体系自体を構成する部分ではないということで、この章の内容に触れるのは敢えて避けていた。しかし、今、こうして作品全体の中で同章が占める位置を確認したならば、そこでの議論は、カーの論理体系が思想史上に持つ意味を解明する中で一つ重要な手掛かりを提示したものと読み解きうる。

簡約すると、理性がより広く用いられるようになり、人間の活動の領野も拡大していくというのが、「広がる地平線」というこの章の題名に込められた意味である。そこでは、歴史が人間の創りだすものであるという、第5章に見られたあの経験的なものへの志向が強調して述べ立てられることとなる。

歴史というものは、人間が時の流れを、自然的過程——四季の循環とか人間の一生とか——としてではなく、人間が意識的に巻き込まれ、また人間が意識的に影響を与えうるような、そういう一連の具体的な出来事として考えだすときに始まります。…歴史とは、人間が自身の理性を働かせ、環境を理解し環境に働きかけようとする、長い奮闘のことなのです。ところが、現代はこの奮闘を革命的なやり方で広げました。今や人間は、彼の環境だけではなく、彼自身に対してまでも、理解し働きかけようとしているのです(129/200-1)。

第5章までの論理体系において、カーの言う歴史が現実そのものとも等しい意味を与えられていたことは、既に指摘した通りである。本節で確認してきた具体的な歴史認識の先にこそ、今の引用に示されているような同時代観があったことを考えると、「歴史とは何か」という問いに答える中、カーの議論が強く示していた経験的なものへの志向は、ここで今一つの独特な意味を持って立ち現われてくるであろう。すなわち、カー

が述べていたのは、人間の理性がその高みへと登りつめてきた「今や」、歴史は現実そのものと化したということだったのである。言い換えるなら、カーにとっての歴史とは、現実と並んで、人為とも等号で結ばれるような言葉であった。テキストに立ち返ってみれば、最初の事実論において既に、こうした認識は仄めかされていたとも言えよう。そこで論じられていたのは、ただ存在する基礎的事実なるものに、歴史家という人の手が加わることで初めて、歴史は生まれてくるということであった。カーの体系において、この世界を超えてるものが事物の判断に不要であるとすれば、それはもはや、人為が自然に勝利を収めたからなのである。

このような同時代理解の現れは、カーが第6章で描く西洋思想史の中でフロイトに与えられている位置に顕著である。この思想家による非合理性の発見は、理性の限界に対する認識の現れとされるのが一般的であろう。しかし、カーにおいて、同じ出来事は、むしろ人間が理性の及ぶ範囲をより明確に認識するようになった進歩の過程と解釈されるのである（133-5/207-9）。ここでは、あの主客二元論の崩壊にも特異な意味づけが為されていると言うべきであろう。というのも、二元論の解体は、人間の主体性の揺らぎを意味するものではなく、むしろ主観が客観までも呑み込んでしまいつつあるがゆえに起こっている現象となるからである。世界のあり方は最早人間に委ねられた——歴史の意味をめぐるカーの論理からは、このような時代認識を読みとりうるのである。

おわりに

以上、『歴史とは何か』の全貌を、判断の土台をめぐる思索として組みなおしてきた。その根底にあったのは、個人と社会とを不可分とする人間観・社会観であった。ただ、この視座自体が、理性の拡大による進歩という、カーの歴史認識を反映したのもであった。彼が構築した論理の体系は、あくまでもこの世界の中に事物判断の根拠を求めようとするものであり、その企図において現実と歴史は等号で結ばれることとなったのであるが、そうした意味での歴史主義を土台で支えていたのは理性への信頼だったわけである。

このように見たとき、『歴史とは何か』は、カーのそれ以前の著作と高い連続性を持った作品として理解されるべきであろう。同書の刊行からそれほど経っていない時期のある書簡において、カーは、「『危機の二十年』やらの世界に戻るつもりは絶対にありません」と述べている。¹⁷ しかし、本稿著者が別所で論じた通り、『危機の二十年』においてもカーは、理性への信頼と進歩主義の理念を議論の基底に据えていた。また、同時代の虚無主義的な精神風土への挑戦というそこでの営みも、その意味するところは土台の模索であって、政治的な意図の面においても、同書のテキストは『歴史とは何か』のそれと共通のものを含んでいた。¹⁸ さらに言えば、その後、『歴史とは何か』の第二版を用意していたカーを悩ませていたのもやはり、歴史を没落として捉える諸々の悲観論であった。¹⁹ カーの思想は、少なくともその根幹にあるものへ目を向けた場合、

17 E. H. Carr to A. Meyer, 30 April, 1963, E. H. Carr papers, University of Birmingham.

18 拙著『国際政治学の誕生——E・H・カーと近代の隘路』（昭和堂、2012年）。同書の結論部分において著者は、『歴史とは何か』がカーの政治思想の到達点である可能性を示唆した。本稿は、そこでの主張の中核部分を遅ればせにテキスト解釈から裏づけたものとも言える。なお、『危機の二十年』と『歴史とは何か』の連続性については、他に、Babik, *op. cit.* ただし、本稿著者としては、二つの作品が実質的な議論において共通しているという面での同論文の主張には異議がないものの、その共通点をもってカーが（フランクフルト学派の流れを汲む意味での）批判理論を唱えていたとする解釈には必ずしも同意しない。

19 死の前にカーが（仮草稿として）完成させていた第二版序文では、このことが明記されており、また彼が第二版のために用意していたメモの中では、カフカを初めとする20世紀の作家への言及が、第一版から新たに付け加えるべき点として記されている。E. H. Carr, "Preface to the Second Edition," in Carr, *What is History?* (2001), xlix-liii; R. W. Davies, "From E. H. Carr's Files: Notes towards a Second Edition of *What is History?*," in Carr, *What is History?* (2001), lv-lxxxiv.

彼自身の自己評価がいかなるものであったかに拘わらず、その知的生涯を通じてかなりの一貫性を有していたものと思われる。²⁰

他方、その意味で、『歴史とは何か』の論理体系は、『危機の二十年』に見られたのと同様の脆弱性を内包している。この体系は一つのアポリアを抱え込んでいるのであり、それはあの基準としての未来が持つ観念的な性格をその原因としている。歴史がすべてを包み込んでいたとすれば、カーが観念したところの未来は、事物を判断する上での参照点であった以上、いくらアド・ホックなものであったとしても、それは同時に、ある種の絶対性を帯びたものでなければならなかった。さもなければ、客観性はあくまで関係性の中で担保されるものである以上、基準は失われ、相対主義が支配してしまうこととなるであろう。この点について、カーは次のように述べている。

歴史における絶対的なものというのは、私たちが出発するところの過去にあるものではありません。またそれは、現在にあるものでもないのです。なぜなら、現在の思考はすべて必然的に相対的なものですから。歴史における絶対的なものというのは、未完成な、生成の途上にあるもの——私たちが向かっていく未来にあるもので、私たちが向かっていくにつれてようやく形をとるもの、また、その光の下で私たちが、前進する中で、過去に対する自分たちの解釈に少しずつ形を与えるものなのです。これは、歴史の意味は最後の審判の日に啓示されるという宗教神話の背後に潜む現世の真理です。私たちの尺度は、昨日も今日もいつまでも変わらないものという静的な意味の絶対ではありません。そういう絶対的なものは、歴史の本質と相容れないものです。しかし、過去に対する私たちの解釈に関して言えば、それは一つ絶対的なものです。それは、ある解釈は別の解釈と同じくらい結構なものだとか、どんな解釈もそれが生まれた時と場所においては正しいとかという相対主義的な見解を退けます (115-6/180)。

基準はこの世界の中に求められなければならない。しかし、現在に見いだそうとすれば相対主義の危険が忍び込む。他方、過去に定めてしまえば社会の存続していく意味が曇らされてしまう。経験的なものに止まる中では、歴史の中に、その続いていく先の未来以外に基準の存在する可能性はない。しかし、未来とは、歴史の延長にあるとはいえ、もはや経験を超えてたものではないか。単純に未だ来たらざるものを絶対的と措定するだけでは、宗教的な救済への道に戻ってしまうであろう。だとすれば、未来は固定され決定されたものではなく、変化を許すものでなければならない。けれども、やはりその未来は同時に基準としての役割も果たさなければならない。したがって、そこには、一定の普遍性が要求されることとなる…。

こうして、未来を持ちだした瞬間から、カーの論理は解き難い循環に落ち込んでしまっている。I・バーリンはそのよく知られた批判の中で、カーの歴史が勝者の歴史に墮する危険性を指摘していたが、つまるところ、カーの言う進歩とは、より上位の俯瞰者が現れるたびに前任者がそこへ吸収・互換されていくようなものでしかない。²¹ だとすれば、その無限の果てにいる観察者が真に普遍的な絶対者として探り当てられて

20 ただし、このように述べたからといって、カーの各著作のあいだに具体的議論や雰囲気の上での差異が存在しないということにはならない。他の論者らも指摘してきたように、『歴史とは何か』のカーは『危機の二十年』のカーよりも楽観的であるといったことは言えよう。こうした意味でのカーの非連続性については、特に、有泉、前掲論文。

21 I. Berlin, "Mr. Carr's Big Battalions," *New Statesman* (5 January, 1962), 15-16. カーとバーリンとの論争については、Evans, *op. cit.*, xv-xxii; 王前「ある歴史家と哲学者の論議——E・H・カーとアイザイア・バーリンの歴史哲学をめぐる論争」『思想史研究』2号(2002年), 169-185頁, 松村高夫「歴史認識論と「歴史認識問題」」『三田学会雑誌』98巻(2006年), 548-55頁。

しまわない限り、暫定的に保持される種々の目標は、各々の時代を生きる人々にとって、過渡的で相対的なものとしか看取されえないのではないか。『歴史とは何か』のある箇所においては、1880年代の歴史家よりも1920年代の歴史家の方が、そして1920年代の歴史家よりも紀元2000年の歴史家の方が物事をより客観的に判断できるという言葉すら認められる（124/193）。このように観念された意味での進歩は、カーの主張に反して、非目的論的なものでも不連続なものでもあるまい。未来の普遍性を担保しようとしたカーは、自身の価値判断をそこに滑り込ませ、自らを科学者から預言者に変貌させることでその解決を図ってしまったように見える。²²

カーがそうしてでも何かしらの客観性を求めねばならなかった背景として、先述の通り、同時代の精神風土に対する応答があったとすれば、彼の思索が哲学的というよりもイデオロギー的とする先行研究の解釈は妥当である。²³ 一般的に言って、より善い未来という概念が同時代への危機意識と絡み合ったものであるとすれば、カーの論理体系そのものが彼の時代認識の産物と見ることも可能である。²⁴

しかし、カーの議論のイデオロギー性に対するそうした価値判断をそれはそれとして措いた上で、その論理が持つ意味とそこにまわりつく政治思想上の含意を問うことこそが本稿の課題であった。その関係から言うと、論点として重要なのは、経験的なものと客観的なものとをめぐるジレンマが何を意味しているかということである。そして、カーが直面していたこのジレンマは、現実主義と歴史との関係について示唆するものを有している。以下、この点について若干の考察を提示することで、本稿の結論に代えたい。

現実主義は、そもそも意味内容が不明確な語ではある。とはいえ、その名称に鑑みた場合、それが現実なるものを規定するところに開始される——そして、そのために特定の観念的なものを現実ではないとして退ける——思惟様式を指すということは、ひとまず言ってよいように思われる。²⁵ その点、現実主義は、物事を不断に変化させていくものとしての歴史とは折り合いが悪いとも考えられる。しかし、その伝統に属するとされてきた思想家らを見るならば、古代のトゥキュディデスは歴史家であり、『君主論』のマキアヴェリは『デイスコルシ』の著者でもあったように、現実主義の思想にとって歴史はむしろつきものであった。逆

22 ここでの科学者と預言者という言葉については、神島四郎「事実の客観性と関係の客観性——E. H. Carrの歴史哲学批判」『史学』35巻（1962年）、241-68頁。

23 ただし、この代表的な例であるジェンキンスの研究において、カーのイデオロギー性を暴き出す証拠として特に重視されているのは、先にも触れた未完の第二版の序文である。その点、ジェンキンスは、カーの意図を推定する上で、少なくとも20年にわたる時間の流れを無視している。さらに、ジェンキンスの議論は、『歴史とは何か』第6章の内容に一切触れることがない。そうしてカーの歴史認識を検証することは避けつつ、他方で近代は終わったという自身の時代診断を忍び込ませることで初めて、ポスト構造主義的な視座の優位が担保されているとすれば、相対主義を掲げながらにして己の相対性に無自覚なジェンキンスの議論もまた、一つのイデオロギーと呼ぶべき側面を有しているものと思われる。Jenkins, On 'What is History?'.

24 善き未来の概念と現在への危機意識とのこうした関係については、R・コゼレック『批判と危機——市民的世界の病因論』（村上隆夫訳、未来社、1988年）。

25 このような定義に基づいて語られる現実主義は、もはや何か特定の内実によって規定される統一的思想体系ではない。本稿著者としては、現実主義という語でもって語られる何かしらの思想的伝統があるという、これまで広められてきた認識の意味を問うことこそ現実主義に対する最良の接近法であり、その上では、現実主義という語が持ちうる意味作用がまず検討されねばならないと考える。本稿で用いている現実主義の語も、現実主義の名が指し示しうるものの便宜上の言い換えであって、この単一の名称の下に括られてきた様々な思想家の言説には何かしら共通の意味作用があるという仮定を、ひとまずは前提に据えている。以下本文で展開している推論は、こうした仮定自体がはたして成り立ちうるものか、現実主義は思想史を描く上で有意義な範疇なのか、というところまでをも射程に含めながらこの概念について問うていくための、萌芽的な考察である。現実主義の定義をめぐっては、次も参照。拙稿「現実主義」押村高（編）『政治概念の歴史的展開 第7巻』（晃洋書房、2015年刊行予定）。

に、少なくともこの数十年の動向について言うならば、国際社会の構造的な不変性を前提とした20世紀後半の現実主義理論に対しては、イデオロギー的な観念論であるとの批判が投げかけられてきたであろう。²⁶

現実主義と歴史をめぐるこうした関係についての考察としては、国家理性の歴史と歴史主義の展開を同列に論じようとしたマイネッケの試みが、深い関連を持つものとしてよく知られている。しかし、そのマイネッケも、この二つの歴史について、結局は二冊の別の書を記すにとどまった。²⁷そして以来、今日に至るまで、現実主義と歴史との関係について、十分に議論が進められているとは言い難い。そのことは、英米の政治哲学で再興を見ているところの現実主義に目を向けても確認しうるところである。ロールズ以降の倫理学説に対して、この現実主義と歴史学で言う文脈主義とが並べ置かれるとき、他方でこれら二つの思惟様式がどのような関係に立つのかは分明でない。²⁸

現実主義者ないし現実主義的な要素を含み持つ理論家とされてきたカーについて、先述したその知的連続性を前提とするならば、本稿での議論はこの現実と歴史との関係について一つの洞察を含んでいる。カーの場合、歴史は現実を破壊するものではなくむしろ基礎づけるものとしてひとまずは扱われていた。しかし、繰り返すように、その背後には理性の支えがあったのであり、この世界の中に止まろうとしたカーの方策は、実のところ、超経験的な観念に担保されていたとも言える。経験を超越するものを峻拒することでこそ、現実なるものへの接近は観念の媒介を断ったより直接的な形で可能になるものと期待される一方、そうして客観的な基準が失われてしまったならば、現実なるものを画定する営みはその土台を崩壊させてしまうこととなる。歴史にこそ基準を求めつつ、しかしそれゆえに経験的なものとしての歴史を超越する視座へ横滑りしてしまったカーの蹉跌は、現実を規定するという、現実主義が思想として成立する上で達成すべきところの行為が、にも拘わらず有している多大な困難を指し示したものと読みうるのである。

仮に以上の推論が妥当と認められるのであれば、ここからは、現実主義に接近を始める上での少なくとも二つの道が想定される。一つは、この世界にとどまろうとする現実主義にとって、それゆえに事物の流転によって押し流され続けざるをえないというジレンマは必然なのかと問う道である。この問いへの答えが然りであるとすれば、現実主義とは結局、歴史主義を別な語で言い換えたものに過ぎないのかを明らかにせねばならず、その解次第では、現実主義という語彙も放棄されるべきであろう。これとは別に、この歴史主義にまつわる相対主義を克服する点にこそ、現実の規定を伴う思惟様式としての現実主義の核心があるのではないかと問う道もある。この線に沿えば、逆説的にも、常に必要とされる何かしらの超経験的な支柱の、その求められ方にこそ、現実主義の現実主義たる所以は認められなければなるまい。²⁹

26 例えば、D. S. A. Bell, "Anarchy, Power and Death: Contemporary Political Realism as Ideology," *Journal of Political Ideologies* 7(2002), 221-39.

27 この点については、W・ホーファー「刊行者の序文」F・マイネッケ『近代史における国家理性の理念』（菊盛英夫／生松敬三訳、筑摩書房、1960年）、1-27頁。

28 今日の政治哲学を現実主義および文脈主義との拮抗から見たものとしては、J. Floyd and M. Stears (eds.), *Political Philosophy versus History? Contextualism and Real Politics in Contemporary Political Thought* (Cambridge University Press, 2011). この論集でも、文脈主義を扱った部と現実主義を扱った部は分かたれている。なお、ここで言及している今日の英米政治理論における現実主義もまたその意味するところは曖昧であるが、目下の議論では、ともあれ現実を規定する必要をその中心に据え、その中で特定の観念的なものを拒否する思惟様式という、あの前述した特質においてはそう呼ぶことができるものとして、カーを初めとする国際関係論の中での現実主義と通底するものを持った思惟様式と捉えている。国際関係論における現実主義と政治理論における現実主義との関係については、次も参照。W. E. Scheuerman, "The Realist Revival in Political Philosophy, or: Why New Is Not Always Improved," *International Politics* 50(2013), 798-814.

29 これらのいずれとも異なる第三の道として、現実主義の「政治的」現実主義たる意味に探究の射程を絞るということも想定することは可能である。しかし、この方途は、根本的な解決へと結びつかないように思われる。というのも、そこでは改

このいずれ道を選ぶべきかという、現実主義思想史の書き換えにも通じうる問いに対し、本稿の知見のみをもって答えることは当然できない。現実主義の内実を解き明かしていく上では、複数の思想家について比較検討を重ねることが不可欠であろう。³⁰ 目下のところは、この点を一つの課題として確認し、またそこに切り込んでいく手掛かりをえたことをもって、満足したい。

[付記] 本稿の執筆に際して、英国バーミンガム大学図書館所蔵のE・H・カー未公開資料を利用した。なお、本稿は科学研究費補助金（基盤研究（C）25380208）に基づく研究の成果の一部である。

（旭川校准教授）

めて、政治の定義が問題となるわけであるが、いざ何かしらの定義が導きだされたとして、ではそれがなぜ現実という言葉と結びつくのかということがやはり問われねばならなくなるからである。したがって、政治的という言葉に冠するに先立っても、まずは現実主義という語の意味作用が確定されねばならない。目下の議論において、政治的の語を排した現実主義の表記を用いているのも、そうした認識に基づいてのことである。

30 カーと同じく現実主義者とされまた歴史学的な思惟を展開し、他方で明確に宗教的な信仰を掲げていたH・バターフィールドなどは、特に有効な比較の対象と考えられる。一般的に言って、宗教は、政治が欲する判断の土台を提供しうる一方で、判断の問題を絶対者の決定に回収し政治の余地を消し去ってしまう可能性も有している。本稿で触れた『歴史とは何か』第3章での宗教に関する議論においては、カーもまたこのような認識を有していたことが窺われよう。その上で、カーは、当該箇所において、バターフィールドの名を挙げながら次のように述べている。「ルター派の神学者カール・バルトは、天上の歴史と地上の歴史との完全な分離を宣言し、後者を俗権に委ねる…。私の見るところ、バターフィールド教授が「技術的な歴史」について言うときにも同じことを意味しています。技術的な歴史というのは、みなさんや私などがいつも書こうとしている、またバターフィールド教授自身が今まで書いてきた、唯一の歴史であります。ところが、この奇妙な形容辞を用いることによって、彼は、私どもとしては問題にする必要のない秘教的ないし摂理的な歴史を信じることへの権利を留保しているのです」（69/107-8）。ただ、20世紀のキリスト教神学では神の超越性をどう捉えるべきかが一つ重要な論点を成してきたことからして、バターフィールドの立場もカーが理解していたほど単純なものではなかったと考えるべきであろう。カーといわゆるキリスト教現実主義とのあいだには、現実主義と歴史との関係および現実主義と超経験的なものとの関係をめぐって、カーが見ていた以上に多様な論点が横たわっていると推察されるわけである。差し当たって、宗教と政治との緊張関係については、柳父園近『政治と宗教——ウェーバー研究者の視座から』（創文社、2010年）、序論。また、20世紀神学における超越の問題については、深井智朗『超越と認識——20世紀神学史における神認識の問題』（創文社、2004年）。